

(曾於郡末吉町諏訪方)

**位置と環境**

入佐遺跡は、末吉町諏訪方の入佐集落の西南部に延びる道路沿いにある。東側は大淀川支流の谷頭部分にあたり急崖であり、台地は西側に広がっている。南側は菱田川の上流部で、やはり急斜面となり隣町の大隅町域である。標高は約240m前後である。

入佐遺跡の所在する諏訪方は、末吉町の西部に位置しており、標高200～300mのシラス台地を大淀川・菱田川の支流が樹枝状に浸食しており、台地上は畑地で、台地下は河岸に狭小な水田が広がっている。

**調査の経緯**

本遺跡は昭和38年に調査された。当時、高木秀吉は、道路の開削が行われた際に掘割の断面に土器片のあることを河口貞徳に連絡し調査に至ったものである。高木の観察通り住居跡であることが確認されたが、道路の開削により半分は破壊状態であった。

**遺構と遺物**

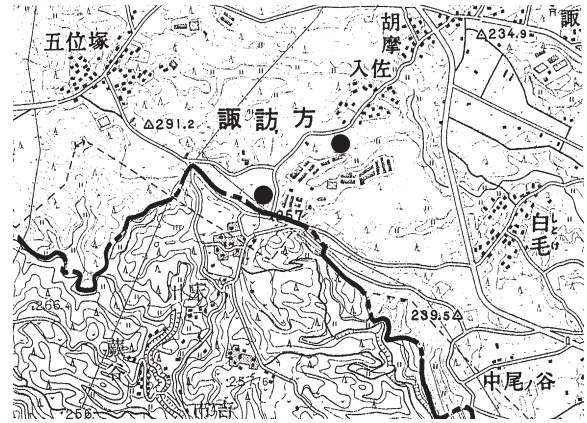
昭和38年の末吉郷土史の遺跡発掘概要報告によると、遺物包含層が第I層（褐色層）の下部から第II層（紅褐色粘質層）の表面であり、住居跡は第II層に掘り込まれていると記録されている。この地層を今日の発掘成果を踏まえて同定をすると、第I層は御池ボラの上層で、奈良・平安期の遺物を出土する黒色土層との間に該当すると思われる。第II層は色相や粘質から通称二次アカホヤと呼ばれる層に該当するであろう。

本遺跡の竪穴住居跡は、道路工事により主体部は失われているが、残存部から円形プランであり、直径260cm、深さ70cmを測る。そのうち半径65cmの半円が残り、中心部分に炉跡を有するものである。

出土土器は、入佐式土器で、縄文晩期前半の土器型式として標識遺跡となった。

器種は浅鉢と深鉢が主で、ほとんど浅鉢は精製土器で深鉢は粗製土器である。

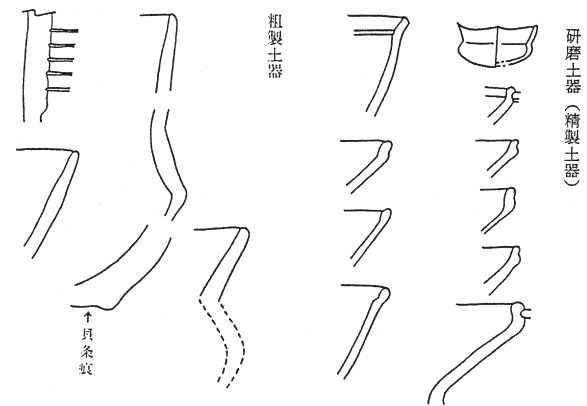
時期は縄文時代晩期前半に編年され、河口貞徳は南九州の縄文晩期土器編年を上加世田式→入佐式→



第1図 入佐遺跡の位置

黒川式→井手下式土器とした（昭和47年=1972）。

浅鉢土器は、黒色研磨土器で、第2図のうち頸部から間延びして外反し、「く」の字状に屈曲して立ち上がり、外面に沈線が1条施されるタイプが最も典型的である。また、上述のタイプの口縁部屈曲が



第2図 入佐遺跡の出土土器

なく、胴部から直線上に立ち上がるものは、数量的には少ない。

さらに短い内湾状の口縁部が強く外反するタイプがあり、出土比率は割と高い。なお、底部は丸底になる。

深鉢土器は、最も出土数の多いタイプは、頸部から口縁部が外反し、肥厚しながら幅広の文様帯をつくり、沈線が多条化（3～5条）するものである。ほかに胴部は張り、頸部はくびれ、口縁部は外反するタイプもある。なお、底部は上げ底になる。

この入佐遺跡の西南方向へ約500mには、塚ヶ段遺跡が所在している。

塚ヶ段遺跡では竪穴住居跡、炉跡、集石、埋納石

斧，焼土などが検出されている。石器は石斧，磨石，石皿，石匙，石錐，石鏃などの石器類と勾玉，管玉，小玉，岩偶，異形石器などの特殊石器が出土している。石刀も表面採集している。土器は浅鉢と深鉢が出土する。滋賀系土器が出土しており，櫃原文様とみられるものもあり，改めて全国の縄文晩期文化との比較検討の資料として貴重である。

入佐遺跡を検討する上で塚ヶ段遺跡が近在し，入佐遺跡の内容を補完することを報告しておきたい。

#### 特徴

入佐遺跡は，縄文晩期の入佐式の標識遺跡であり，その後の資料の増加でその型式設定の妥当性が証明

された。そして，内容が豊富な文化を持つことが明らかになりつつある。

#### 資料の所在

入佐遺跡は，末吉町指定史跡として指定されている。出土遺物は，末吉町立歴史民俗資料館に展示・保管されている。

#### 参考文献

末吉町1987『末吉郷土史（三版）』

鹿児島県考古学会1990『鹿児島考古』24号

河口貞徳

（勝目興郎）